

キブツ研修生募集

主催・日本協同体協会

後援・イスラエル大使館

募集趣旨

当協会では一九六六年からイスラエル大使館後援の下に、毎年キブツ研修生を募集しています。そして選考のうえその合格者をグループでキブツに派遣しています。今回は第十一回研修生を左記要項にもとづき募集します。応募資料として本紙掲載の、『なぜキブツ研修生を送るか』、『キブツとは何か、なぜ日本に必要か』をよく読んで、その趣旨、内容に共鳴する方は要項にもとづき参加申込みをして下さい。

応募資格

- 一 キブツ研修目的が明確で、六ヶ月間のグループ生活のできるもの。
- 二 年令十八才以上三十才までの健康で、肉体労働に耐える男女。

必要書類

- 一 本人の写真付履歴書。
- 二 健康診断書。
- 三 上司、先輩、教師などの推薦書。
- 四 応募論文「私はなぜキブツに行きたいか」。四百字詰原稿用紙三枚以上。
- 五 父兄または近親者との連帯保証書。
- 六 申込み時に事務取扱費五百円添付提出。

応募しめ切り

- 一 一九七二年、十月末日必着。

選考方法

- 一 書類、論文審査（不備の場合失格）。
- 二 面接選考（東京、札幌の二ヶ所）。
- 三 合宿一週間（選考合格者のみ）。

旅費、経費負担

- 一 往復旅費とも本人負担。往路十八万円。外に経費負担五千円。復路については現地解散なので個々人によって違うが、航空機運賃最低は約二十二万円。
- 二 合格決定一週間以内に予約金二万円を支払う。予約金は旅費に振りかえられる。

旅程概要

（変更もある）

- 一 東京→モスクワ、航空機で十時間。
- 二 モスクワ二泊、市内見物。モスクワ→キシネフ、航空機。キシネフ二泊、コルホーズ等見学。キシネフ→アテネ列車、約二十時間。アテネ一泊。アテネ→テルアビブ、航空機。各滞在キブツへ。

出発予定

- 一 一九七三年四月上旬

キブツ研修内容

- 一 一定の条件のもとに六ヶ月間同一のキブツでグループ生活をする。それ以後は自由行動。
- 二 一日六時間、週六日間の労働、一日二時間のヘブライ語授業。時々の講義。
- 三 労働の種類は、果樹園、農場、牛舎、

支給物その他

- 一 労働に関する被服物（服、靴など）は全部支給されるが、それ以外のものは持参。
- 二 労働は無報酬。滞在中の住・食は保証。毎月わずかながら小使いも与えられる。
- 三 キブツでの作業中の傷病については保証される。旅行中、および私用の傷病に備えて旅行保険をかけておく。

その他

- 一 当協会からキブツ研修経験者がグループ期間中世話係として居るので、英語のできない者も参加できる。

なぜキブツ研修生を送るか？

常任理事 手塚 信 吉

日本協同体協会



中東紛争の禍中にあるイスラエルになぜキブツ研修生を送るのかと問う人があれば、日本政府はなぜ中東紛争の禍中にあるイスラエルやアラブ各国と交友親善の関係を続けているのかと反問したい。我々は国是に従って十年前から毎年数十名のキブツ研修生をイスラエルに送っているが、それは文化の交流であって他意はない。若しキブツがアラブ側にあれば研修生をアラブに送るであらう。

キブツ研修生にはどこからも一円の補助金もないので、多額の自弁旅費で遠く地中海沿岸の国イスラエルに行くのであるから、キブツ思想やその真価を充分研究して、実習体験を是非してみたいと言う人に行って貰いたい。尚今後とも毎年行なう予定です。

一 今の日本にキブツ思想がなぜ必要か

今の日本の一般大人の世代は資本主義経済同志打ち戦の闘士であって、対立観と競争意識が習性化し、出世主義、成功主義、金儲け主義、の中に人生の生きがい求めんとする物質文化の讃美者であり、頑固な我子まで幼稚園時代からエリート意識の中に引入れて、小学校、中学校、高等学校と試験勉強進学競争だと画一的な教育に追立て、肝腎な本人の持つ生れた天分資質を無視してしまう。それが第二の天性化して一生を支配し無味乾燥な非協力社会の闘士にしたるばかり。

そして一方では古色蒼然とした事大思想が根強く社会を支配しており、身分とか家柄とか学歴、貧富差まで結構世間に通用し、不勞所得者が尊敬され、肉体労働が賤まれ、不平等社会を讃美するのは被搾取階級の方であるから珍現象の世相である。

これは個人主義、個別対立主義の人生観に關係がある。誰でも機会さえあれば他人を抜く一儲けを考えたり、宝くじ根性を生じたり、射幸心の因となっている人が多い日本で、

たのが翌年初秋であった。

その帰途イスラエルに立寄り、はじめてキブツという協同体社会を知り、こおどするほど喜んだのであった。自分が多年産業界にあって、その不合理に苦しみ、矛盾に泣かされた災いが一掃され、夢にまで見てきた理想の社会を目前にみただけであった。それから新旧七ツのキブツを歴訪宿泊しながらつづさに研究し、その内容を知れば知るほど、我が意を得たものであり、これを広く日本の社会に普及したいと考えたのであった。

帰国早々日本最初のキブツの本として「新しい農業キブツ」という拙著を世界ジャーナル社から発行し、その読者の支持を得て日本キブツ協会を設立し、全国的に講演、座談会幾百回に及び、その間にもキブツ研修生を年間イスラエルに派遣して今日に至っている。

三 キブツとは何か

そしてその真価は

今更説明までもないが、キブツとはヘブライ語で集りの意であるが、単なる集りでなく協同体または協同一体化社会というのが適切であらう。左の五原則が守られている。

およそ一八〇度転換した思想を持ち、良心社会キブツに憧れをもつ青年男女が急増しつつあることは、日本の将来に曙光をもたらすものであらう。

二 私がなぜキブツに心惹かれたか

有為な日本の青年男女諸氏にキブツ研修をお勧めするからには、先づ私自身に確固とした確信がなければならぬ。私がなぜキブツに引かれたか、それをお話します。私の著書「生きがい」にも書きましたが、某社に勤務して学歴と実務との不合理を痛感して、一生涯人に使われる人間にはならないと決意して独立、電気工事業を始めたのが昭和三年七月、満二十二才の時でした。

それから幾変転を重ねながら、興亡浮沈の繰返しから、弱肉強食の現実社会を体験しながら、露骨なまでに矛盾と不合理を痛感したのは、第一が「同業者間の唾み合い殺し合い」であり、第二が自社内の労使の賃金闘争であった。日本産業界をみると、経営者の総エネルギの八〇％ぐらいはこれ等の闘争に空費しているというも過言ではない。

にがい体験であるが従業員も開業以来の者を中心とする百名ぐらいいまでは、何をするにも意志が疎通し信頼感が物を言うが、八百人千人になると労働組合は強固な外郭団体の支配を受け、次第に会社側とは対立關係を生じ、社の業績が優秀なほど戦術的に集中争議に利用され易い。こんな場合善良な従業員ほど反って仇となる場合が多い。結局人の罪でなく制度上の欠陥なのである。即ち資本が人間を支配する資本主義社会では、人間の良心とか誠意とかは反って邪魔になることを、心の底から知らされた。しかし私は幾多の危機に直面しながらも、遂に一度も交渉決裂スト騒ぎの経験はなかったが、その労使対決の経験から資本が人間を支配する旧態資本主義の矛盾を次第に痛感するようになり、協同体経営の理想を唱え出していた。

そして私は昭和二年日高地方十ヶ町村の電灯電力供給事業に手を染めてから、一村一工場誘致を推進して、農工一体化運動にも共鳴し、その後の工場建設は農村に限っていた。その名残りは今も北海道、岩手県、福島県等に現存しているが、農村問題には特に興味を持っていた。昭和三十六年末、産業界を引退して、西欧各国の農工商全政策研究に出かけ

一 自由意志による団体であり、何人も加入も脱退も自由である。

二 民主主義の社会であって、すべての決定は総会の多数決による。

三 集団主義社会であって一切の財産は集団の所有であり、生産、分配、消費など集団的に組織されている。

四 各人の能力に応じて働き、各人の必要に応じて分配することを信条とする平等社会である。

五 キブツ社会は労使なき経営、階級なき組織、賃金なき労働、搾取も不労所得もない皆労働社会である。

そしてキブツは本紙上でも何回も述べたように一九〇九年ロシアから移住して来た、ユダヤ系青年男女十二名が、ヨルダン川畔の荒地を手に入れて、炎暑、悪疫、貧困と闘いながら開拓し完全協同体生活を始めたのが、キブツのはじまりテガニヤである。そのテガニヤは今は人口八百人に増加し、ゴルドン記念館でも有名である。

それから六十余年を経過し、次第に発達して大は二千人ぐらゐから小は百人ぐらゐまで、二五〇集団その人口は十万人以上に達しており、農業ばかりでなく、工業、輸送業、漁業、

観光事業等にも進出している。尚イスラエル

国にはキブツの外にキブツほど完全協同社会ではないが、生活と財産を別々にするが、生産、販売、購入等を共同化し、相互援助社会を形成している、モシヤブ・シトフィーもあり、販売、購買のみ共同化し必要に応じて助け合いをするモシヤブ・オブディムもあり、その数もそれぞれキブツ集団数と同数ぐらゐあり、日本の農村などでは私有を認めながら、共同化を進め得る点で学び易いかも知れないが、元来これ等はキブツあつてのモシヤブであり、あくまでキブツが中心である。

キブツは時代の所産であり、人間社会の新生活原理を示すもので真理そのものである。私は長い半世紀にわたる生産活動を顧みて、努力のエネルギーの八〇%まで自由競争、私闘磨擦に浪費し、社会のためにお役にたつた自信のあるものは、せいぜい二〇%に過ぎない。それでもその二〇%でも社会のお役に立て得たものは幸せであるが、全く無駄骨に終っている人が大半ではなからうか。

協同体社会の特長は、集団中心の生産活動であり、無駄に消耗する努力エネルギーは計画生産により有効化することが出来る。だからキブツでは各自が僅少の奉仕労働で豊かな

文化生活が可能になり、その生産は社会のお役に立っている。あくせく働く世界の人類が、その八〇%まで貧困飢餓民であることは、個人主義無駄骨折が主原因であることが、キブツの内容を検討すればすぐ判る。

自由競争、弱肉強食、乱造乱費、不平等社会、そんな資本主義経済の許されたのは、世界の人口が六億人時代の遺物である。当時は南北アメリカの総人口が五百万足らず、土地でも物でも切り取り勝手、自由競争こそ進歩の母であり、乱造乱費こそ経済繁栄に直通した時代であつた。今人口は六倍に激増し、しかも文化の発展から一人当りの消費物資は十倍二十倍となった。乱費文化など許される時代ではない。イスラエルのキブツは、そんな時代の要求に応じて発生したものである。

狭い国土、過剰の人口、資源皆無に等しい日本がアメリカの猿真似経済。消費は美徳なりとは何事であるか。必ず天の罪科を受ける時が遠くあるまい。光化学スモッグ一ツでも馬耳東風の政治態度は何事であるか。最早日本は営利経済総精算時代にある。キブツ協同体思想を知り、キブツ協同体生活を知ることが、次代日本の方向を知る上に絶好の教室であらう。

イスラエル対アラブの紛争は不幸なことであるが、日本はその善悪を言々する立場にない。日本政府の方針に従って双方に交友親善の情を全うし、アラブからは石油を、イスラエルからはキブツを、そして双方とも祖先は同じセム族の流れとしく。両者の親善回復を祈るのみ。

四 人類は協同体なり

キブツを知る上に最も大切なことは、人類は協同体なりと言う真理を悟ることである。人間は個人では生きられない。その個人では生きられない人間が個人主義、個別対立経済に生きようとするところに、無理があり、人間社会の悲劇も不幸もみなこと誤った生き方から派生している。この点に気付いて真理に忠実な生き方を知り同志で実行しているのがキブツなのである。

個別対立社会の真姿を知るために、数匹の養犬に大きな容器で食物をいっしょに与えてみた。仲良く食べば皆満腹できる量であつたが、われ先に独占しようと、激しい奪い合いでヒツクリ返したり踏みつけたり、とうとう

だれの口にも入らない内に土まみれにして終つた。これを見て大畜生のあさましさと笑う資格は個人主義人間社会にはなさそうだ。犬の私欲はその日その日の欲であるが、人間の私欲は百年先まで考へての欲だけに、同類の迷惑は畜生界の比ではない。実際人間社会は原始時代の大昔から利己心という悪魔に誘われて、その餌の奪い合いで悲劇の繰返しをしてきたにすぎない。

この愚かさに気付いた同志が集団生活をしているのがキブツなのである。この点を毎日みつめて暮すとキブツの良さが、無限に広がってきます。財産保善ひとつ考へても、どんな億万長者でも、個人のものは百年と維持することはまずできない。統計によると私有財産の持続年数は平均四十年にすぎない。そして私財の散逸には必ず惨事が伴う。「親が貯めた子が散らす残つたものは悲劇だけ」ところが共有財産は共同の力で保存するもので、取られも盗まれも、乱費もせぬ。協同協力の力は無限であり絶対である。それを如実に教えているものが、完全協同体キブツである。ただキブツも各自の利己心をどう処理するか、成否はこの一点にあるようだ。研究すると無限の楽しみがある。

〈共同体研究会〉へのさそい

新しい事務所に移ってからしばらくとだえていた『共同体研究会』を7月から月に一回のペースで再開しました。会場はちよつと手前ですが、協会事務所を使っています。

7月7日に第一回目の研究会を開きました。中島泉さんを中心にして、ガンジの『ヒンズー・スワラジ』（インドの自治）の話の聞き、サルボクヤ運動についても学びました。そのあとは自由討論の形で、参加したるうぶ・もぐら、振出塾の原さんも加わって共同体、ガンジー、非暴力について話がはずみました。

8月18日は第二回で小長井春雄君の日本社会の基礎としての自然村、その崩壊、科学文明と真の人間性回復をめざす運動の必要、など広範な話を聞き、示唆されることが大きかったと思います。

次回は野本三吉さんの「日本人と神道」についてです。告知板のとおり、9月13日6時半より協会事務所です。毎月号の告知板に注意して下さい。